

Ⅲ 明治期韓国で活躍した外交官・若松兎三郎の生涯 (V)

永野慎一郎 (Ph. D)

アジア近代化研究所理事・大東文化大学名誉教授

若松兎三郎の遺産

若松兎三郎が木浦領事時代に外務省に送った領事報告は外交記録として外交史料館に保存されている。その中に若松の提案によって推進された陸地綿栽培および天日製塩開発に関する詳細な記録がある。その中に今まで明らかにされていない史実が存在している。

本稿は、秘められていた外交記録の中から、若松兎三郎自身が口述して作成した経歴書『自己を語る』(未定稿)を手掛かりに、100年以上前の公文書などから事実関係を確認して書き上げたものである。

当時の外交記録はすべて筆字で書かれたものであるため、中々接近し難い研究分野であったが、歴史の記録として残す必要があるという使命感から、敢えて挑戦し、研究を進めた。

若松兎三郎が日本の外交官として朝鮮において推進した仕事の中で歴史的に記録されるべきであると考えられることが二つある。一つは、韓国の綿作改良への貢献であり、もう一つは、天日製塩を提案したことである。これらは木浦領事時代に熱心に取り組んでいた仕事である。

歴史は真実に基づいた記録でなければならない。若松兎三郎が日本の外交官として日本の国益のために発案し、推進し

たことは紛れもない事実である。しかし同時に、日本の国益だけでなく、現地の人々の生活向上のための産業開発と捉え、それが日韓共生のために役立つと考えて行動したことも否定できない。若松兎三郎は日本の外交官として充実に業務を遂行した。同時に、韓国の産業開発は日韓両国にとって「一挙両得」であると、外務大臣に報告していることから分かるように、韓国の産業発展への寄与となると、考えて行動した。

若松の思想や哲学の形成過程の青少年時代、同志社学校で新島襄の教えを受け、クリスチャンとなり、人類愛と平等思想に基づく人道主義的精神を持ち、植民地支配下にあった韓国の人々に対しても愛情を持って接していたことが様々な場面に表れている。

木浦領事時代の1902年～1905年の時期は旧韓末の大韓帝国時代で、日本の植民地になる前であり、統監府が設置される以前であったので、韓国外交権および内政権が維持されていた時代であった。したがって、外交官身分としての行動においても相手側の事情を考慮する必要があった。また、若松の人生哲学から共益のために働くというアイデアが浮かぶことも可能であった。

日韓協約によって京城に統監府が設置

されると、状況が一変した。それまでの実績が評価され、上層部の勧誘によって全羅南道地方の産業発展に資すべく外交官の身分を放棄し、地方行政官に転任することとなったが、植民地政策が進展することによって若松のような人道主義的思想や哲学は通用しなくなった。日韓併合によって状況は一層厳しくなり、日本の官吏である以上、植民地政策に反するような行動はできず、良心の呵責を覚えながら与えられた業務をこなすだけの職務であった。

その時期は、外交官身分を放棄し内務省所管の地方行政官であったので、外務省への復帰もできず、26年間、8人の子供たちと共に韓国で暮らした。帰国してからは在日韓国人たちの人権擁護のために走り廻った。

若松が韓国の産業開発を推進した中で、産業発展への貢献となり、歴史的に評価されている事業といえば、米国種陸地綿の栽培による綿作改良と天日製塩であった。しかし、この二つの事業が若松兎三郎の提案によって始められ、成功したにもかかわらず、歴史の記録には若松兎三郎の名前さえ出てこない。いわば、秘められていた歴史上の人物であった。最近新しい事実が発掘され、日韓両国において研究が進み、そのような事実が明るみに出て、ようやく陽の目をみるようになった。

陸地綿の発祥地・木浦高下島には、木浦市によって「朝鮮陸地綿発祥地記念碑」が文化財として指定され、現在韓国で

消えかかっていた綿花を再びみられる綿花畑が造成されている。この試みが多くの市民によって受け入れられたことで、木浦市は綿花畑の拡大を決め、8万2500㎡規模の親環境綿花団地の造成と合わせて、木浦儒達山から高下島まで3.36km(海上0.82km、陸上2.54km)距離の海上ケーブルカーの敷設を推進している。綿花団地造成は来春から始まり、海上ケーブルカー運行は来年末に予定されている。この海上ケーブルカーは木浦の港湾および市街地を一望でき、国内最長距離となることから、話題を呼びそうである。

綿花団地造成は観光用だけでなく、綿製品の製作により、観光客へのお土産用として販売することから始まり、民間への綿花栽培および綿製品生産というビジネスへの拡大が予想されるので、大いに期待されている。

陸地綿試作 111周年記念行事

若松兎三郎が1904年に木浦・高下島において米国種綿花陸地綿を試作してから、111年になる。111周年記念行事の一環として、若松兎三郎の評伝『綿の花とその日本人 ～外交官若松の韓国26年』(金忠植著)がソウルのメディアメディアから2015年9月25日刊行された。その出版記念会が10月12日、ソウルプレスセンターで行なわれた。日本から若松兎三郎と所縁の大分県玖珠町出身衛藤征士郎衆議院議員や若松兎三郎の遺族など10余名が出席して

祝賀会に花を添えた。当初用意された座席が足りず、緊急別室に補助席を設定するなどの盛況ぶりであった。韓国を代表する政治家、マスコミ関係者、学者など有識者130余名が出席し、植民地時代韓国の産業発展に貢献した“善良な日本人”であり、日韓共生のために苦悩した若松兎三郎の人生哲学について語り合った。

韓国側を代表して羅鍾一元駐日大使と日本側を代表して衛藤征士郎衆議院議員が祝辞を述べた。また、日本から出席した若松兎三郎の孫たちが紹介され、盛大な拍手を受けた。

衛藤議員と若松家の遺族たちは若松兎三郎のゆかりの地である木浦を訪問した。朴洪律木浦市長と金榮善全羅南道副知事がそれぞれ歓迎会を開いてくれた。訪問団は木浦市関係者の案内によって高下島の陸地綿発祥地記念碑や綿花畑を視察した。そして若松兎三郎が勤務していた旧日本領事館をはじめ近代歴史館、木浦共生園など日本関連施設や金大中ノーベル平和賞記念館などを視察した。また、伝統市場など旧市街地を散策し、庶民の生活風景や町並みを垣間見ることもできた。

訪問団に参加した若松兎三郎の孫の高須俊明日本大学医学部名誉教授は感想文を寄せてくれた。

木浦ツアーは晴天に恵まれ山と海の色合いを堪能することができ、旧日本領事館の赤レンガも殊のほか美しく見えました。陸地綿記念碑と綿畑をひとまとめにして観光できるようにする夢に実現性があるのは嬉しいことです。

百聞は一見に如かず、開港前の木浦が日中海路の中継地として栄えた跡を海洋博物館にて見知り、開港以後の数十年の発展を旧日本領事館や歴史館で認識し、韓国の5指のうちに数えられる都市の一つであって優秀な人材を育んだ土地柄であり、名門学校を有していた史実を知りました。戦後の飛躍的発展を埋立地に建設された眼前の新市街や林立するホテル、アパート等の建築物、高下島へ到る海上大橋、整備された品揃えを誇る大スーパーマーケット、よくできた博物館群や金大中ノーベル平和賞記念館、道路、道路を走る多数の内装外装ともにきれいな韓国車などに伺い知ることができました。

若松兎三郎が朝鮮に残した事績を機縁にして両国民の交流が深まり広まることを第3世代遺族の一人として願っています。そのために私も、今後も微力を尽くしたいと思います。

若松兎三郎と衛藤征士郎との奇縁

郷土の大先輩若松兎三郎記念行事に参加した衛藤征士郎とは同郷の森村出身であったことの他に意外なところで縁があったことが後に判明した。若松兎三郎は朝鮮での官職が終われば、故郷に帰って余生を送ろうと考えて、生家の跡地(生家は明治16年森村の大火の時焼失)に邸宅を再建築した。新築の時期は釜山府尹時代の1910年代か、仁川米豆取引所社長時代の1920年代と見られる。しかし、若松は帰国後大分には帰らず、京都に新た

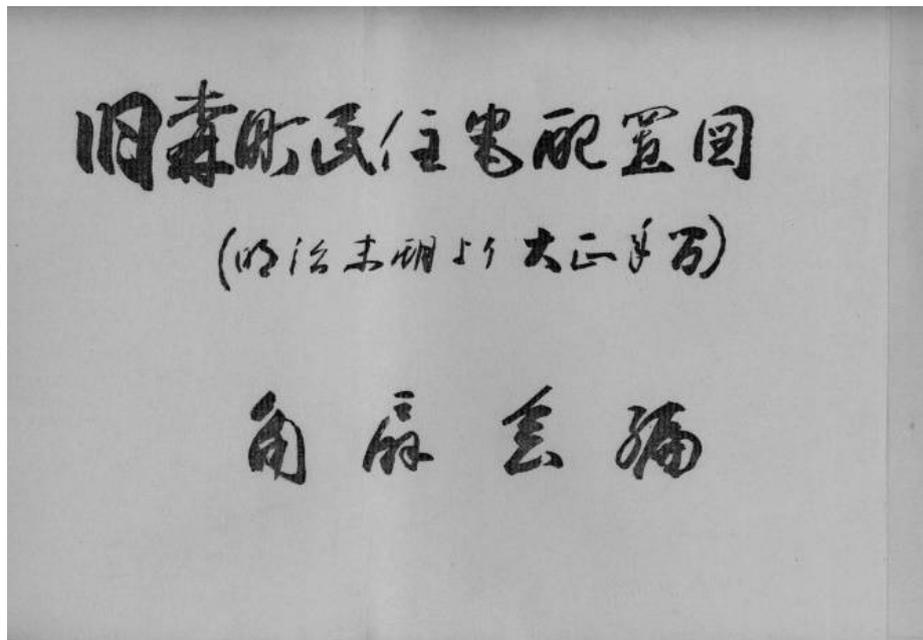
な居住地とした。そのため、その邸宅に戦後朝鮮から引き揚げてきた甥の若松淳二(弟元四郎の次男)がしばらく居住し、兎三郎同様、熱心なクリスチャンであった淳二が教会として使用していた。

1971年に玖珠町長に就任した衛藤征士郎がその家を購入して居住した。衛藤は最近まで自分が居住していたその家が若松兎三郎邸であったことを全く気付かなかった。

若松兎三郎の直系子孫若松正身が

1978年に祖先の故郷玖珠町森を訪問し、史料館関係者の協力を得て、祖父兎三郎の生家の場所を突き止め、カメラに収めた写真と、その時、入手した『旧森町民住宅配置図(明治末期より大正年間)』からこの事実が明らかになった。当時の住宅配置図と邸宅の写真をみて、若松兎三郎邸が自分の住宅になっていたことを知り驚き、何かの所縁であると衛藤征士郎感想を述べた。

旧森町民住宅配置図





注：右端の下から4番目辺りに「若松兎三郎」がある。

因縁の若松兎三郎及び衛藤征士郎邸の写真



衛藤征士郎は玖珠町長を2期務め、1978年から参議院議員、引き続き衆議院議員になったことから、森町を離れ、その住宅はその後更地になった。

大分県玖珠郡森村188番地字轟（現在の大分県玖珠町森370番地）の邸宅に明治期の外交官若松兎三郎と現代の政治家衛藤征士郎という郷土を代表する二人の人間が偶然にも同じ敷地で暮らしていたことはやはり奇縁である。

衛藤征士郎は全国最年少町長として“大分のケネディー”と名を馳せて政界に足を踏み入れた時に、郷土の大先輩の邸宅を住居として使用していたことは単なる偶然とは思えない。

若松兎三郎は明治時代に郷土森村が生んだ傑出した外交官であった。異国の地で人類の平和と安寧のために尽くしたコスモポリタンであった。衛藤征士郎は現代の日本の政界を代表する政治家である。郷土玖珠町長を足掛けに参議院議員を1期務めた後、衆議院議員となり、連続11期当選した。参議院議員6年と衆議院議員33年の国会議員39年の議員歴を持つ古参政治家である。その間、防衛庁長官、衆議院副議長を歴任し、数多くの議員連盟会長として国政だけでなく、国際交流にも尽力している。

郷土森村の誇りである二人の人物は明治生まれと昭和生まれの時代は違っても、郷土が生んだ二人の著名人が同じ敷地内で暮らしていたということはやはり奇縁である。

韓国語版の出版と韓国マスコミの反応

日本に先んじて刊行された韓国語版『棉の花とその日本人 ～外交官若松の韓国26年』は、日韓共同プロジェクトの成果である。110年以上前の外交記録など日本側の資料発掘および若松兎三郎の経歴書『自己を語る』の入手や遺

族とのインタビュー、さらに現地踏査などは永野慎一郎が担当した。これらの資料を基に韓国側の資料確認などの作業に加えて、関連資料を収集し、韓国の読者にアピールするために編集して執筆したのは金忠植（嘉泉大学教授）である。金教授は東亜日報東京特派員兼支社長を勤め、慶応義塾大学で博士号（メディアジャーナリズム専攻）を取得した新聞記者出身学者であり、日本と韓国の事情を最も良く知る人である。

新聞記者時代に鍛えられた金教授の文章力は定評がある。その筆力を行使して、歴史的な事実を紹介しながら、読み易く体裁の良い本にしたのは金教授の手腕によるものである。

金教授は「はしがき」において韓国語版の出版の経緯について次のように書いた。

「私たちにはなじみの少ない若松兎三郎という人物を発掘・追跡した記録が本書である。

「日本帝国」の利益のために誠実かつ真面目に勤めた日本人官僚、結果的に朝鮮半島の産業および経済に少なからぬ影響を与えた日本人、日本に帰国後は在日韓国人の人権保護のために努力し、韓国人教会が自由に礼拝できるように日本の警察を説得し廻った誠実なクリスチャンをどのように評価すべきか？果たして韓国の読者に紹介する価値があるだろうかと思っただが、司馬遼太郎の『「明治」という国家』に李舜臣に関する記載があることを思い出した。

日露戦争当時、韓国では李舜臣という名前さえ知らなかった。とっくの昔に忘れていた。李舜臣を発見したのは明治の日本海軍であった。その研究をやったのも明治の日本海軍であった。豊臣秀吉時代李舜臣に悲惨にやられた日本海軍はその李舜臣を研究し、教えた。日本歴史には‘海の名将’がなかったから。

李舜臣を学び、戦術を鍛えていた明治時代の

海軍将校水野広徳は対馬湾に自分の水雷艇と共に潜みながら、李舜臣の霊に祈ったという文句を読み直し、若松の生涯を紹介しようと決心した。若松が心情的には韓国人にとって“好ましくない”朝鮮総督府の官僚であったが、日本海軍の遺産 (legacy) となっている李舜臣霊前で日本の勝利を祈っている日本の将校もいるじゃないか、それならば、綿花栽培と天日塩開発という敵産を残して朝鮮半島を離れた若松についても事実そのまま伝える必要があると確信した。

日本と韓国は運命的な隣国であるため、相互利益となる未来を切り拓かなければならない。相手国のためではなく、自国の利益のためである。この小さい発掘記録が複雑に絡み合っている日韓関係の解決の糸口となり、互恵な両国関係に展開する一粒の種子となれば幸いである。」また、推薦文を書いた秋圭昊元駐英国大使・元駐日公使は、「日韓の間では、筆舌では言い尽くせない曲折と怨念の歴史があるが、これを単細胞的、条件反射的に単眼で見て対応するのではない。高いところから“日韓関係史”を複眼で見ながら、立体的・総合的に、互恵的・未来志向的にアプローチすることが我々にとっても利益となる。その意味から、若松の生涯と韓半島で彼が残した足跡は複眼で見るべき日韓関係史の立派な素材であると考え。このように埋もれていた人物を発掘して両国関係を事実に基づき、再評価することは価値のあることであり、意義深い努力であると確信する」と述べた。

最近の複雑な日韓関係を気にしたもので、昨今の世間の雰囲気を感じての表現である。そのような雰囲気が現実に日韓両国の特にマスコミ界に存在していることも事実である。

日韓のマスコミ界に詳しい人によれば、韓国のマスコミ界では、日本特派員経験者を「親日派」と呼び、日本のマスコミ界では、韓国特派員経験者を「朝鮮族」と呼んでいるそうである。これは隠語のようなものであろうが、何が目的なのかはさておき、最も相手のことを知る立場にある言論界のオピニオンリーダーたちに対する表現としては極めて不適切であり、心細い話である。

本研究の目的は日韓関係の歴史の中で、事実関係を確認し、歴史的に評価できる部分があれば受け入れ、良くなかったことは教訓として記憶すべきであるという考え方から、若松兎三郎という過去の人物に注目し、彼の足跡を調べ、思想、哲学、人生観について研究し分析した結果、広く紹介する必要があると判断して調査・研究を進めたものである。

若松兎三郎が朝鮮半島南部の木浦・高下島で米国種綿花陸地綿を栽培した 1904 年から 111 年に当たる年であることから、まず韓国で若松の業績を知らせる記念事業をやることにし、その一環として若松の評伝の出版作業をはじめた。

折しも韓国が日本の植民地支配から解放して 70 年、すなわち終戦から 70 年、日韓国交正常化から 50 年という記念すべき節目の年である。ところが、さらなる発展のために未来志向の様々な祝賀行事があつてしかるべき時期に、日韓関係は冷えきった感がある。

信頼関係の構築には時間がかかる。しかし、それを壊すのは簡単である。心ある人たちの努力によって長期にわたり積み上げてきた信頼に基づく友好関係が崩れてしまうことは好ましくない。それに屈せず、忍耐強く信頼醸成のために努力している人たちが世の中にはいる

ということを忘れてはならない。

日韓関係の不正常な時期に日本の外交官および高級官吏として勤務し、植民地政策の一環として始めた「綿花」と「天日塩」の開発への貢献に対する評価ということになると、韓国内ではそう簡単に受け入れないだろうという意見があった。本研究の目的は日本の植民地政策を肯定しようとするものではない。結果的にその成果は日本の敗戦によって残してきた遺産となったが、それはアイデアと技術提供によるもので、それを作り上げる過程は韓国農民や労働者たちの努力による「血と汗」の結晶であったことを理解しなければならない。また、それに関わった多くの人たちの「苦勞と喜び」が同時に存在した歴史があるということも忘れてはならない。すなわち、日韓協働の成果であると認識すべきであると考えられる。

若松兎三郎が木浦領事館勤務中に発案し、推進した「綿花」や「天日塩」の開発事業は日本の国益だけでなく、現地の人々の生活環境の改善に必要な産業開発であるため、「一挙兩得」であると強調し、現地の行政官や農民たちを説得していたことを素直に考えれば、日韓共生への方策であったと思える。

韓国語版の出版は韓国マスコミ界に大きな反響を起こした。本が書店に並ぶ前から次々とインターネット上で書評や紹介記事がたくさん出た。予想外の高い評価に安心した。不正常な日韓関係の現状を憂慮し、真実の発掘に努めて欲しいという励ましのメッセージとして受け止められるものもあった。無駄な心配をしたことがむしろ恥ずかしい。韓国のオピニオンリーダーには良識があると改めて感じた次第である。

結びに代えて

若松兎三郎は働き盛りの人生の重要な大部分を朝鮮で暮らし、朝鮮との関わりのある仕事に従事した。大分の山村で生まれ、幼少の時から漢学を学び、神童と呼ばれるほど頭の良い少年であった。向学心に燃えた若松は出身地森村で初等教育を受けたが、満足せず、単身京都に行き、何の充てもなく同志社を受験したが、生涯の恩人となる京都の財界人田中源太郎と出会い、何の不自由なく勉学に励むことができた。同志社の創立者新島襄はじめ、欧米帰りの新進気鋭の教師や宣教師たちから、多様な知識や価値観を学んだ。

東京大学法学部在学中に現役で超難関の外交官試験に合格するなど希望に満ちたエリート外交官としてのスタートであった。外交官としての職務は9年間勤めた。同志社時代に国際的な感覚を身につけ、英語を習得し、流暢な語学力を活用して外交官試験に合格したが、勤務先はニューヨーク領事館勤務2年半を除けば、そのほとんどが中国や朝鮮であった。得意とする語学力を十分に活用できなかったことは悔いが残った。しかも本省勤務はわずか数か月であった。

その間の事情について遺族によれば、子沢山で自分の家族の生活費や教育費に費用がかかった上に、兄弟の生活や甥の学費の面倒までみていた。さらに自分の学費を出してくれた田中源太郎にその学費の返済をしていた。そのために毎月の出費が多く、国内勤務の給料では生活できないため、国外勤務を自ら願い出たという事情があった。生真面目な若松の性格がそのまま表われている。国内勤務の時は収入が少ないので、裕福な田中氏への返済は待ってもらい、親戚への援助額を減らす方法もあっただろう

が、若松兎三郎は約束したことだからと言って返済や援助額を減らすことはしなかった。個人的な栄進は省みず、家族を大事にし、与えられた任務を忠実に務める誠実な人柄であった。このために、外務省のエリートコースの赴任先は空きがなく、急ぐあまり中国や朝鮮勤務になったのではないかと子孫たちは話している。

若松には時の運も味方しなかった。また政治情勢の変化に素早く対応できなかった面もあった。東アジアをめぐる国際情勢の変化に伴って、日本の大陸進出政策が展開されるなかで、朝鮮半島への積極的な介入が始まり、植民地支配へと進展していた。

統監府設置によって駐韓公使館および領事館が廃止されることになった。外交官身分の若松兎三郎は外交官として転任すべきか、それまでに取り組んできた朝鮮の産業開発に愛着を持ち、外交官身分を放棄して残留し職務を継続すべきかの岐路であった。若松が残留を選択した背景には伊藤博文統監はじめ当局の上司たちから余人を持って代えがたいとして強い勧誘があった。やりがいのある仕事に対する執着心から断れない残留であった。若松自身も朝鮮を立派にすることが日本の国益にかなうことであり、外交官として成果を上げたことに満足し、それに対する評価として職務の継続のための残留要請であれば引き受けざるを得ないと判断したに違いない。後に考えるとこの時の選択が若松兎三郎の人生における分かれ道であった。

結局、木浦領事館廃止によって、外交官の身分から統監府の地方行政官である木浦理事官に転任となった。内務官僚に移籍した若松兎三郎は木浦、元山、平壤の理事官を勤め、日韓併合後の朝鮮総督府設置に伴って、釜山府尹（現

在の市長に当たる）となった。釜山府尹就任までは日本の高級官吏として順調に出世コースを歩んでいた。

釜山府尹就任直後から寺内正毅総督の軍治主義と若松の文治主義的考え方が相容れなかった。地方制度改正をめぐる意見の衝突があり、妥協できない若松は不必要な存在となった。そのために釜山府尹時代は昇級や昇進もなく、3等級のまま9年間同じ職に据え置かれた。

若松兎三郎は外交官試験に合格し、外務公務員の身分であったが、朝鮮に残ったため内務省所属の地方官になった。内務省では高等文官試験行政科合格者ではないため、奏任官の最高の職位である釜山府尹（3等）のポストから勅任官ポストへの昇進は困難であるということが分かった。

人事上の不当な処遇を受けていると感じた若松は外務省への復帰を打診したが、外務省では、高級官吏としての地位が高い割には勤務経験が特殊で、外務省から見ると非常に使いにくい存在であった。そのために外務省への復帰は不可能であるという判断が示された。

そういう意味では、若松兎三郎は官運に恵まれず、不運の人であった。外交官としては領事止まりで、内務省行政官としては釜山府尹で終わった。外交官試験に合格した外務省の同僚の中には大使や本省局長、外務大臣、総理大臣を務めた人がいる中で、官職としては途半ばで終わった。若松にとっては悔いの残る生涯であった。

しかし、若松兎三郎は木浦領事時代に近代朝鮮産業の草創期に「綿花」と「天日塩」を導入させる先駆的な役割をし、韓国の産業発展に寄与するなど日韓共生のための輝かしい業績を遺した。日韓交流史に記録されるべき立派な業

績である。これは他に代えがたい功績である。

本稿の主人公である明治時代の外交官若松兎三郎は26年間韓国で生活しながら、日韓共生のために尽くした稀代の外交官である。若松の足跡をたどり、外交官時代の外交資料をはじめ、遺族や関係者が保管している家族関係資料などを収集し、さらに遺族たちとのインタビューや通信連絡を通じて、若松兎三郎という人間像を知ることができた。植民地支配下であった朝鮮において、このような時代に良心的な日本の知識人が存在したことに感動し、歴史の1ページを映る鏡として記録に残す必要であると考えるようになり、本稿執筆を開始したのがそ

もその始まりである。折しも若松兎三郎が木浦領事に赴任し、日本で栽培できない米国種綿花陸地綿を高下島で試作してから112年になる年である。若松が共生および平和の象徴として選定した試作地の高下島が綿花の島として脚光を浴びようとしている。白い綿花畑が島全体に広がれば、若松兎三郎が当初、“平和の島”として考えていた夢が実現される期待が膨れ上がる。若松兎三郎の生き方が100年すぎた現在、日韓交流、文化交流への良き例として相互理解を深める何らかの材料になれば幸いである。(完)